故先生世にいましして、足下に競ひたまはゞ如何あらむといふ、因碩この事は予も年來考ふる事にて候、予先を置なば、百戰百勝おそらくは相違はあらじ、先生は此の道の聖にして、前に古人なく、後に來者なく候へども、予先だにせば、必ず負じと存じ候なり、碁の位はあらまし知れければ、さとりたまへといふに、其の人、實に世人の評にも、また足下の申給ふやうに申候なりとほむれば、因碩これもまた年來思ひ考ふる事にて候、今先生と眞の勝負を試み候はゞ、某三目弱かるべしと云ふ、其の人不審顏しければ、世の人いかでか予が碁の位を知り候はん、今の局は十九道を縱横にして三百六十一目なり、此の局の上の手段は、予みな悟り居候へば不覺は致すまじく、また此の局を四ッ合せ候へば、一千四百目となり候、もしこの局上にて戰はむとき、某は望洋することも候はんずれども、先生は猶も廣かれとこそおぼすらめ、然れば三目にても覺つかなく候と答へし、藝も智もかぎりなきものなり、

〔當世武野俗談〕快全圍碁

當時圍碁の名人は、遠國波濤を越て爰に遊行する內に、備中の國より源五郎と云者來る、此男は五十年以來の名人なり、年毎に江府へ出て能人の知る所なり、彼源五郎が息男なりとて、前髪立の三松といふ小倅を、一兩年以前より連來る、是又碁打の生來ともいふべし、器用不思議の上手なり、玆に江戸常住して圍碁の名人と云は、增上寺塔中所化全快、若僧なり是今の世の碁に妙を得たる人なり、今年若なれば、此上後年は、日本にて此僧の上を越す碁は有べからずと云、不思議の上手出來るものぞかし、

〔視聽草六集九〕碁道珍話

宮本貞佐　知行百五十俵　有浦貞理　同

右兩人十二三歳之比、□碁を能致候ニ付、文章〇文章ニ字有誤院樣御治世之節、桐之間へ被召出、御家人